

風俗文選通釋

二十九  
二十  
文  
碑傳

利5  
4218  
8





利 5  
號 4218  
卷 8

風俗文選通釋卷之十九

排諧發願文

儀化

聖靈祭文

李由

光緒二十六年

文選

卷之十九

排諧發願文

儀化

光緒二十六年

光緒二十六年

風俗文選通釋

文

十九







此篇 此篇の果報のついでにその果報のついでに

人死しては道はせられしは目も心もいふは世間の業因の  
いふは世間の業因

此篇の人の業報の必其くしては世間の業因の  
とて世間の業因の天の阿彌陀佛の生れ世間の業因の  
業因の世間の業因の死しては世間の業因の  
世間の業因の死しては世間の業因の

世間の業因の死しては世間の業因の  
世間の業因の死しては世間の業因の  
世間の業因の死しては世間の業因の  
世間の業因の死しては世間の業因の  
世間の業因の死しては世間の業因の

世間の業因の死しては世間の業因の  
世間の業因の死しては世間の業因の  
世間の業因の死しては世間の業因の  
世間の業因の死しては世間の業因の  
世間の業因の死しては世間の業因の

世間の業因の死しては世間の業因の  
世間の業因の死しては世間の業因の  
世間の業因の死しては世間の業因の  
世間の業因の死しては世間の業因の  
世間の業因の死しては世間の業因の



初まきよき枝もつねを今幹のまきよりとまきよき  
まきよき大楠のまきよき大木枝もつねより出て良き  
坤の向いなき拾遺文乾より葉の出るまきよき枝あり  
木のて枝より其枝百五十歩と云法河内傳りま  
の別法物ハ塔殿のまきよき枝の法也其まき  
其例ハ密結樹ありと云

まきよきありまきよき人のまきよきと云法河内傳りま  
終末同一まきよき人の飽すわあしよきまきよき  
まきよきまきよきまきよきまきよきまきよきまきよき  
何のまきよきまきよきまきよきまきよきまきよき  
まきよきまきよきまきよきまきよきまきよきまきよき  
死たんと活はつとまきよきまきよきまきよきまきよき

まきよきまきよきまきよきまきよきまきよきまきよき  
まきよきまきよきまきよきまきよきまきよきまきよき

此まきよきまきよきまきよきまきよきまきよきまきよき  
教子丹朱或云舜以子高均愚故作圍棋以教之其  
法非智者不能也本朝ハ京都三條寂光寺の住僧  
日海上人道願圍棋と云信也云元を云く法師  
任一福のまきよきまきよきまきよきまきよき  
元祿の道兼古今未嘗カノ名人と云塞のまきよき  
まきよき地經地經和經を云く又法華經方便品曰  
乃至童子戲聚沙為佛塔如是諸人等皆已成佛道  
補註云童子者七八歳以上乃至未娶者之總名也云云  
若一枝まきよき法佛まきよき一目投つてハあまきよき



人かゝるにうへ西方よとて、百味のふの飯食よとて、  
蕎麦切ハハの次まゝとて、

此言ハ立花とて、ものごと考ふるもの、  
供養一念佛心とて、  
此言ハ立花とて、ものごと考ふるもの、  
供養一念佛心とて、

今吾も亦の縁縁ハ狂言縁縁の多ふ世、  
此言縁縁の縁又の縁也、  
此言縁縁の縁又の縁也、  
此言縁縁の縁又の縁也、

地獄餓鬼畜生修羅の悪道よハ、  
其なりとて、  
成佛の爲、  
文集卷七十一、  
誤翻<sup>ヲ</sup>爲當来世、  
佛の功、  
勤求得樂<sup>ニ</sup>云々、



















女を御烟のいふは其の意は思ふべくもあらず  
いふは其の意は思ふべくもあらず  
花白の太極のいふは其の意は思ふべくもあらず  
花白の太極のいふは其の意は思ふべくもあらず  
花白の太極のいふは其の意は思ふべくもあらず

剃髮文

支考

是ハ支考舎羅小多ク剃髮セシハ其の文あり  
浪花の舎羅剃髮の前ハ舎羅といハ剃髮の法ハ舎羅  
云此舎羅ハ持シハ舎羅といハ剃髮の法ハ舎羅  
云此舎羅ハ持シハ舎羅といハ剃髮の法ハ舎羅  
云此舎羅ハ持シハ舎羅といハ剃髮の法ハ舎羅

名義集云、娑羅林語此ハ堅固、娑羅樹ハ樹ノ類  
皮ハ青白クシテ葉ハ甚ク潤クシテ冬冬ハ其ハ堅固  
ナリナリハ娑羅樹ト号スルハ此ハ浪華の舎羅其舎羅  
ハ娑羅の堅固なるナリナリハ此舎羅の  
剃髮の前ハ舎羅といハ堅固なるハ剃髮の法ハ舎羅  
トシテ堅固ハ此堅固なる舎羅トシテ又別ハ此堅固  
ナル舎羅ハ此ハ此舎羅ハ此舎羅ハ此舎羅ハ此舎羅  
海の拍子ありテ其堅固なるハ此舎羅ハ此舎羅ハ此舎羅  
年の其葉ハ多クシテ強固ナリハ此舎羅ハ此舎羅ハ此舎羅  
ハ此舎羅ハ此舎羅ハ此舎羅ハ此舎羅ハ此舎羅ハ此舎羅  
ハ此舎羅ハ此舎羅ハ此舎羅ハ此舎羅ハ此舎羅ハ此舎羅  
ハ此舎羅ハ此舎羅ハ此舎羅ハ此舎羅ハ此舎羅ハ此舎羅







母もきよとのを常ゆきと彼が欲する如くありし  
馬の鬼より揚妻妃の死せし地は其の存にあらざる  
花やうも馬鬼のあり一夜の因縁あり果し  
揚妻妃の思ひよりせしむる彼が死せるの意は

まのふ縁茵二千合の娘くらり之毛

くふの事原のつきの尾と達梨

張無盡の猿猊藉錦茵くろく色まじりしや

子合の娘と陶朱公二千合の事なり

柏木、南門の妻

虚堂和尚の侍

柏木の南門の妻は源氏若菜下よりなり

あそびつらきものさしふあそびつらきものさし

猫のけりしきぬと立しとていふさうし大馬のあそび

女らけりしきぬと立しとていふさうし大馬のあそび

虚堂和尚のつら後傳燈録并本録の行状より

杭加徑山、虚堂福師、明列蒙縣陳氏子也諱智愚

号虚堂、息耕、表德、号也嗣法、於運菴、云語録十卷

又詩集、其の喫茶者流、其の語、其の語、其の語、其の語

のここと

高しは迷ふ 桐平よあそびし物也の終る也

高しは迷ふ 障子よあそびし物也の終る也

梅也の終る也、伊勢物語の月やあそびし物也の終る也

あそびつらきものさしふあそびつらきものさし











美舟浦く時くつりて海に流るる

一、其のあや 兵どもにゆきのあは

二、代の宗羅一將の中と云世系詳按るる

三、代経清其子権太史治衛陸奥國押使奥御

四、館と号し荒川太郎武貞の嫡子と武衛家衛謀叛の

五、と云義家の子と云軍号は成功の後義家弟良

六、治衛と号し不陸奥の子と云保つる

七、其子基衛又と号し奥羽二國に領し平泉に在り中

八、御領と号し其子秀衛官杖宗花又稱子純と文治四年

九、十一月廿二日卒と云治衛と号し其子と云治九十九年

十、其子泉冠者春衛文治五年五月廿九日没と云其子

十一、和泉三郎忠衛と云春衛と号し其子と云拾遺と云平泉に

十二、秀衛と云泉冠者治衛と号し其子と云治院の北の京

十三、河と云金鈴山の陸奥の山ありと号し柳都山の天

十四、龍と号し其子の治衛と号し此山は日始と号し

十五、金鈴山と号し其子と号し其子と云

十六、と号し其子と号し其子と云

十七、と号し其子と号し其子と云

十八、と号し其子と号し其子と云

十九、と号し其子と号し其子と云

二十、と号し其子と号し其子と云

二十一、と号し其子と号し其子と云

二十二、と号し其子と号し其子と云

二十三、と号し其子と号し其子と云

二十四、と号し其子と号し其子と云

二十五、と号し其子と号し其子と云

二十六、と号し其子と号し其子と云

二十七、と号し其子と号し其子と云















俗を寺に志す我とあり侍の事不知んははははは  
むき入る目一命は是れつじ若孔蓋の理處人を親  
よりのいせらる甲斐にありきとて老佛のいささか  
あるとてんの時身代破滅を立所するとして是れ  
天地のそと神く牡丹為る美のひらき切て楊梅葉に  
能とてうの如く思慮その純ることを果に合好の上  
後て條着高き切の急用をそとに終る事との三層  
流とてく書中の條の如くや一而日多く廿二の如く  
自らをそとに思ふ玉やとて四折座の如くするもの  
多は侍とい七種の如きよの落の如く搜と筆の如く  
吹き出たりの留はりの風を如くして水に聲を流し  
妙聞の次より其身身の句に流し侍の如く流す

定常親從者。今其事。一。皇身はつし。山宿の白眼。  
こゝにせしむる遅く。其の日み。一。きおのち。一。おの  
東より。一。何れ任。其の物。一。其の奉。一。其の  
吉野。一。其の如。一。其の如。一。其の如。一。其の如。  
時。一。其の如。一。其の如。一。其の如。一。其の如。  
隔つる。

此書に於て許六李由の友信と云はるる。此書に於て  
交るる者。一。其の如。一。其の如。一。其の如。一。其の如。  
雅善。趙貞固。盧藏用。陳子昂。杜審言。宋之問。畢構。  
郭襲微。司馬承禎。釋懷一。時號。方外十友。餘慶。不遠。  
子昂等。而風流敏辯過之。許六又とて信の友と云はる  
方外の友と云はるる。一。孫列。河野。孝靈。天皇の



皇子伊豫皇太子の子越智親王の後裔河野親経の妻  
かりと安藤の奥戸の清和天皇八代源義朝男八田四郎  
知家の四男奥戸四郎家政の末流の女なりかきく  
源氏相家の巻をよみてせんてききとみはゆめく  
まきくときききききききききききききききき  
くく人のみききききききききききききききき  
詞こときき伊豫相後せん名あききききききき  
深きと深園をみり長恨歌を養在深園を  
くると天竺のきききききききききききききき  
七條の道ききききききききききききききき  
後くききききききききききききききききき  
よ遅くきききききききききききききききき  
よ遅くきききききききききききききききき

秋の夜長く三日對ききききききききききき  
云彼采葛兮百不見如三月兮彼采葛兮百不見  
如三秋兮彼采艾兮一日不見如三歲兮  
よわききききききききききききききききき

後くききききききききききききききききき  
胸膈ききききききききききききききききき  
親好朋友のきききききききききききききき  
室ききききききききききききききききき  
くききききききききききききききききき  
年田のきききききききききききききききき  
片ききききききききききききききききき  
席のききききききききききききききききき



中陰の日記を招くは、おのづから集まる人々の心  
を招くは、おのづから招くは、おのづから招くは、  
おのづから招くは、おのづから招くは、おのづから招くは、  
おのづから招くは、おのづから招くは、おのづから招くは、

此書李由近侍也、  
不肖膈、心脾の同釋、名膈、塞、  
穀不相<sup>レ</sup>乱也、  
此書李由近侍也、  
不肖膈、心脾の同釋、名膈、塞、  
穀不相<sup>レ</sup>乱也、

招魂玉をいひのり、招魂賦をいひ、  
友魂香招魂のり、  
招魂玉をいひのり、招魂賦をいひ、  
友魂香招魂のり、  
招魂玉をいひのり、招魂賦をいひ、  
友魂香招魂のり、

サ、碑堂の垂布の色は、  
中陰の日記を招くは、  
サ、碑堂の垂布の色は、  
中陰の日記を招くは、  
サ、碑堂の垂布の色は、  
中陰の日記を招くは、



とくまると五冠子うらふういふは又選了あるはより後たふい  
因の坊士といふは之傳とて不月南とぬきハ我果〜  
信の断ぬ

此言許六の在信断信の事細かき無碍堂の無布の  
ちも若くといふ事とて雁来野色深き信の事  
色に其まゝ存集し〜とて四處の力を信といふ又五冠井の  
中にも有る舎人等も其人の信の事とて〜別まの信の  
信の事とて〜且其ら〜信の事とて〜成る〜  
信の事とて〜回〜信の事とて〜  
人何〜  
書中ハ鍾子期〜李由伯牙〜許六鍾子期〜  
甚琴言ハ知〜

李由伯牙聞〜他信の事とて〜  
許六伯牙〜  
人の事〜  
我の人の事〜  
結信〜  
行〜  
總評曰文と書と〜  
書あり〜  
祭文吊文の形ハ神鬼と呈〜







風俗文選通釋

風俗文選通釋卷之二

東順傳

芭蕉

牧童傳

支考

公平傳

改卯

五郎四郎傳

支考

靈虫傳

去来

疝氣傳

李由

直指傳

許六

卷之八

傳類

傳ハ其姓名ハ記シ支考ニ書クテ傳ハクニ支考  
列傳ハ其素隱曰列傳者謂叙列人臣事跡令可  
傳於後世故曰列傳今此東順牧童公平傳ハ如キ  
其人ノ子孫ハ其ノ事ヲ其ノ也其ノ事ハ其ノ傳ハ其ノ病  
氣傳ハ如キハ其ノ文ヲ其ノ也直指ノ傳ハ其ノ































昔の事よ跡をせしむ地概破りあはれはまてい何りてそのあり  
候もせし彼公平の由柄の如し上百万民をうけてん  
たぬものなりしなり

坂田公平の事ハ廿六年一々ハ波郎、此傳文もい  
へりや本條傳物の名目も其つゝもふたはゆるり一  
支のまはらち道は師今自れをうへ一節舞妓の狂  
ふも其名もまへり一寺よさのいふつ子のいふ新見を  
昔の物傳よりうへ支のむねをうへて昔の事士今時  
今年もあつたふりしつゝ一圓東の事をも合點  
しつゝ一々も後元後師の事治る壁山の用程を  
あつたふりしつゝ一々も後元後師の事治る壁山の用程を

五郎四郎傳

支考

糸島日誌云六月九日ハ中津藩の連防ハ一々も  
岐の西淨寺と云寺ハ宿と云ふまゝのいふ  
久作といふ女もいふも一々も  
歌のいふまゝの候もいふも  
と云ふも一々も  
方ハ一々も

後世ハ五郎四郎といふものハ一々も  
別ハ一人ハ一々も  
と云ふも一々も  
いふも一々も  
と云ふも一々も











































こゝろはさしつた夢の本は、梅の花 宗國

是より宗國の法梅風と云ふこと、芭蕉の芭蕉の芭蕉の  
ゆゑより神橋成冬の日春の日は、芭蕉の芭蕉の芭蕉の  
芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の  
芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の

芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の

又

芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の

芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の

又

芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の

芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の

又

芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の

芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の

芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の  
芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の

芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の

芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の

芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の

芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の  
芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の  
芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の  
芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の芭蕉の































四不標一其地之徭不化一其人之功德の事は  
後世の傳り多しとて但墓園の碑の如きは  
圓形に穿入して以國形にうつるに標記を  
するものなりとす

壺碑

芭蕉

在奥別市川村多賀城

壺の碑は古くは系祖長朝備へうつるに此芭蕉翁の  
碑と稱するもの奥州紀行の壺の碑と云ふ文章  
からて後人此文を原刻とて其地を去るものなり  
はりの石文は古くは古くは古くは古くは古くは  
久きものなり四維國さるもの教るものなり此碑は  
按察使鎮守府將軍大野朝臣東人二十里之天平癸子

六年春派東海東山節度使同將軍惠義朝臣獨仙造而十  
二月朔日とつるに聖武皇帝の御時かあつたこと  
よみながら石の地をたゞしとて川流して道  
のくまると石の地をたゞしとて川流して道  
町福代寺とて石の地をたゞしとて川流して道  
疑ひなきものなり紀念の記念の記念の記念の  
一徳存命のよるに一務旅の首とて石の地をたゞしと  
て川流して道

監松紀行云市河村古鎮府之墟也村中一部婁上有  
立石所謂壺碑也云去京一千五百里去蝦夷國界  
一百二十里去常陸國界四百十二里去下野國界二百  
七十四里去靺鞨國界三千里是四方國界の里程



即碑文の記さる如く碑文は以て撰る不神龜元年歲次  
甲子按察使兼鎮守府將軍從四位上勳四等大野朝  
臣とあり又天平宝字六年歲次壬寅參議東海東山  
節度使從四位上仁部少卿兼按察使鎮守府將軍藤原  
朝臣朝儀修造也天平宝字六年正月一日とありと略して  
記さるる一拓朝臣の御事也

みらるるはしきまのいさそよの書つてしよの石あり  
つふの石あり御事多し抑此銘りの注は奥列市川村  
多賀城よりとつて是芭蕉翁奥州結句の事なり此  
刻して古碑の傳ふる事なるを物さし後生セウメイに於て是の  
地は標とすの没する一恙を遺す此碑の存する事  
も亦舊蹟の存する事なり海に於て此とあり年記

襄陽の碑の如く陸海碑と稱するもの此法國龜境記  
り芭蕉碑との事其中壺碑との事ありと此碑の  
有る事とあり一云此碑あり觀壺碑の碑も  
あり魚の壺碑とありハハハハハ

笠塚碑

李由

法國龜境記云笠塚ハ湖東平田明照寺より川人  
李由建る笠の園なり

笠方野より撰りてをりて 橋 笠 乾坤無任 同行二人

右ハ古の笠方野の郷の橋と云ハ人李由より撰りてをりて  
滅後ハ撰りて一基の果と云ハ法由より撰りてをりて云  
支那云笠の園ハ法由の撰りてをりてハ法由の撰りてをりて







其の文を定んとして其の事を知るのありては其の河の  
とせしむるに其の事を知るに其の事を知るに其の事を知るに  
其の事を知るに其の事を知るに其の事を知るに其の事を知るに

花より山の日ころの朝のけ 芭蕉  
とせしむるに其の事を知るに其の事を知るに其の事を知るに

隆の事 井村の日はあま 芭蕉 立

古今抄の酒をうき海にうきうきとあはれぬ事  
河ありぬの事 相葉のやうに所はうきうきとあはれぬ事  
とせしむるに其の事を知るに其の事を知るに其の事を知るに

其の事を知るに其の事を知るに其の事を知るに  
いほ河ありぬの事 相葉のやうに所はうきうきとあはれぬ事  
とせしむるに其の事を知るに其の事を知るに其の事を知るに

是の事を知るに其の事を知るに其の事を知るに  
其の事を知るに其の事を知るに其の事を知るに其の事を知るに

世宗の事を知るに其の事を知るに其の事を知るに  
其の事を知るに其の事を知るに其の事を知るに其の事を知るに

此の事を知るに其の事を知るに其の事を知るに  
其の事を知るに其の事を知るに其の事を知るに其の事を知るに  
芭蕉

深川は其の事を知るに其の事を知るに其の事を知るに  
其の事を知るに其の事を知るに其の事を知るに其の事を知るに

其の事を知るに其の事を知るに其の事を知るに  
其の事を知るに其の事を知るに其の事を知るに其の事を知るに



あり小貝塚矣津より有砥塚滑川より又水より多敷ふ  
りて相見塚二方所昔新倉より少少なりん此碑より  
極よきものも多うへ一肥前も海より有塚有り宮鹿建

者一々名所ありて河海の那

本曾塚ハ江以粟津義仲よりり終焉記云義仲の  
直急上人と傳りて一あまかり入るるにふりてある  
塚のたふきりて古といひもあまのつらうりて柳あり  
蓋その墓のちきりて其のふ卯塔のまのりり  
地所より冬枯の芭蕉が枯て名所ありて人の  
るす亦皆李由り高よ同

日一から一と申す李由字買年一僅て二道に書す

此言多塚より向んより李札の御りてて史記吳  
世家曰李札之初使北過徐君徐君好李札劍口弗敢  
言李札心知之為使上國味獻還至徐徐名已死於  
是乃解其寶劍懸之徐君冢樹而去從者曰徐君已  
死尚誰予乎李子曰不然始吾心已許之豈以死倍吾心哉  
是をよ既に芭蕉のふりて其の心より倍りて此  
塚のまのりて高よ同

今身みをきり又文あまのりて



評曰此二碑の文石を刻して其地を去るや壘碑の名有り  
きこころ碑といふるは芭蕉のけしきなりと云ふも何れ  
一石といつて紀りの文を研ぶ所の事なり在せしもの  
遺り又壘像の碑文と壘像よりいへきなりは壘標表  
ともせらるる如明也との門前よりいへ其像の何れよ  
うなる物なり又事多し壘を以て細述する此二碑ハ  
其文のきこころ碑といふるは其の如く壘文  
なりと云ふも出せらるるや洛東双林寺境内よりいへる  
碑のこころ壘像よりいへる

風俗文選通釋卷之二十終





